

教育研究所での 2 年間を振り返って

経営学部経営学科講師 藤原 英賢

私は教育研究所に 2 年間所員として在籍した。教育の研究とは全く無縁であったけれど興味がわいたことがこの 2 年間の成果だと考えている。

そもそも大学院での生活を仙台で過ごしたが、最後の 3 年間は会計専門職大学院の評価基準の作成やコアカリキュラムの検討のサポートをしていた。そこでの経験は教員生活の基礎となっている。

その時考えていたのは、確かに大学院での専門教育の充実は大事だけれどもその基礎は学部教育にあるということで、学部教育の更なる充実が必要なのではないか？ということである。学部での教育の定着がないまま法科大学院や会計専門職大学院へ進学し、学部教育の焼き直しのような内容を提供し、結果として社会が期待する専門家の卵を生み出していない。そして専門職大学院教育のあり方の疑問がもたれているのである。現在、追手門学院大学は教学改革の真っ最中である。その過程で教務委員と兼任して改革に取り組めたのも大学教育者としてのよい経験となった。

教育研究所での 2 年間は、そういったことで学部教育の改革についていろいろな情報を収集することが仕事なのだと考えていたが、やったことはイベントばかりであった。イベントを通じて人脈を増やし、様々な意見交換を行うことで教育改革を充実させることもできるのかもしれない。しかし点と点を先で結ぶ機能が果たして教育研究所にあったのかが疑問である。

教育の基本は学生と教員にある。双方の向上なくして教育の向上はない。これは持論であるが、サーカス的な内容では教育の向上は続かない。大学教員が研究活動を行い、学会での評価を高め、それをみた質の高い研究に触れたい高校生が入学してくる。質の高い学生の活動をみて質の高い高校生が更に入学してくる。こうしたポジティブなサイクルを作り出すためには大学教員の研究活動が必須になると考える。

こうしたサイクルを生み出すことができなかったから今がある。こうしたサイクルは何十年もかけて組み立てていく必要がある。教育研究所は発展的解消するためそのサイクルに個人としてどこまでコミットするのかを今後の課題としたい。